

海外だより

カンボジア北部チョンカル村における運動会の試み

中村学園大学教育学部 中島 憲子

前号（第13巻第1号）において執筆した「海外だより」に再度登板することとなり恐縮するが、編集委員会からご了解いただき、カンボジアにおける学校体育振興への国際教育協力支援として継続して取り組んでいる活動を引き続きご紹介したい。

1. 運動会開催に至るまで

1) なぜ運動会なのか

まず、国際教育協力として私たちにできる協力や支援として、なぜ運動会に至ったのかについて簡単に触れておきたい。これまで複数にわたり現地へ足を運び、探索的調査を行ってきた海野氏は、そこから感じた違和感を以下のように示している（2013）。①カンボジアへの国際教育協力は、多くの国・団体・個人が多様な支援活動を展開している、②しかし、それらは一定の合意された統一方針のもとで有機的な連関を持って実施されてはいないのではないか？③加えて、展開される支援活動が現地の実情や現場の人々の必要と要求にマッチングしていないものも少なくないのではないか？④その結果、一つ一つの善意から発する支援が必ずしも有効に機能していない（＝生きていない）のではないか？といった点である。ここでは紙面に限りがあるので詳細は避けるが、カンボジアにおける体育教育の振興に、日本の体育授業をそのまま持参しても、おそらく効果を上げることができないことは明白である。そこで、カンボジアの現状（当事者の

必要と要求）に合った体育（＝生活体育）であれば、体育教育振興の第一歩として体育を実施する必要や価値の可能性に期待できる。つまり運動会やクラスマッチなど季節的なイベント型の体育行事で、その学校に置かれた条件に沿った企画・内容・方法であれば、体育授業の実現よりも現実的であると考えたわけである。

2) 学生ボランティアの支え

当然、運動会の経験が全くない、それも異国での運動会を教員数名で開催することは不可能である。そこで、筆者らが担当する講義等でボランティアスタッフ募集を呼びかけたところ、4大学（山口大学、中村学園大学、西南学院大学、近畿大学九州短期大学）から、約50人を超える参加があった。そのスタッフ全員で、現地で必要な運動会グッズや、運動会開催に合わせた参加賞として子どもたちに文房具（鉛筆、ノート、消しゴム、鉛筆削り）といった物品の寄付を募る活動を行うこととした。また、こういった寄付活動の運営と並行して、運動会、会計、記録、生活、保健と各係をすべての学生に振り分け、学生の自治的運営を基本方針として進めていった。

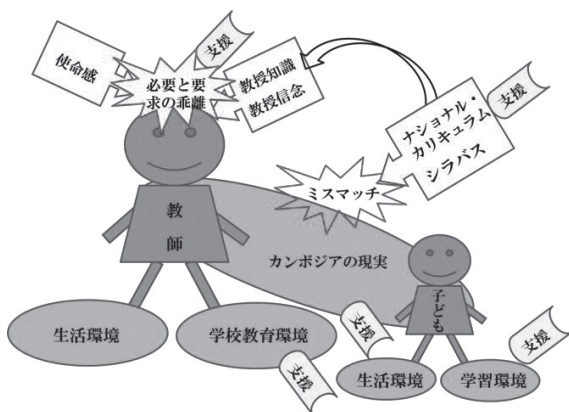


図1 カンボジアにおける教育支援の現状（2012.海野）



↑高校生、中学生、大学生、ラジオを聞いた市民

2. 2013年1月22日、チョンカル村大運動会

1) プログラム

村で初めての運動会であり、先生や子どもたちも初体験である。そこで私たちが意識したのは、「事前練

習を必要としない」「観衆から笑いが漏れる」「道具にお金がかからない」の3つの条件で、その点を確認しながら種目を決定していった。以下が当日行われたプログラムであるが、現地のクメール語にて紹介するために、日本ではお馴染みの「二人三脚」であっても「二人で3本の足競争」と、種目の持つ内容が理解できるよう工夫した。

表1 運動会プログラム

No.	開始	対象	種目名
1	8:00	全体	開会式
2	8:30	5年	ボール運び競走(個)
3	8:45	1年	手つなぎ競走(個)
4	9:00	2年	大切に運ぼうリレー(個)
5	9:15	3年	大きいパンツ競走(個)
6	9:35	4年	二人で3本の足競走(個)
7	9:50	5.6年	へびが網をくぐるリレー(団)
8	10:05	幼稚園	どうぶつ体操
9	10:15	幼稚園	お兄さんのしっぽを取ろう
10	10:30	1.2年	悪魔をやっつけよう(団)
11	10:50	6年	キャンディ探し競走(個)
12	11:05	3.4年	玉入れゲーム(団)
13	11:20	教員他	玉入れゲーム
14	11:35	全体	閉会式

※(個)は個人競技,(団)は団体競技

2) 子どもたち

前日に限られた時間を使ってリハーサルを行ったものの、種目の内容変更等もあり、不安なまま当日を迎えたが、開会式、準備体操と、子どもたちの真剣な眼差しと期待感溢れる表情で取り組む様子から、不安よりも何とも言えない期待感が高まった。子どもたちは、他の学年が行っている競技にも興味津々の様子で、自分の教室の前が応援席だったものの、急遽、競技が行われるエリアへ移動したりなど、予定変更満載であった。さらに、紅白に分かれて集団で競い合うことで、一体感を味わっている様子は、初めての運動会であっても、日本と変わらない光景(同チーム勝利の



↑友だちと協力しながら二人三脚でゴールへ

喜び様は日本以上)で、友だちや同チームを応援したいという子どもたちの姿は圧巻であった。

3) 教師たち

運動会前日、そして当日の朝にも、担任の先生方に運動会が成功するための運営の仕方や役割について丁寧に伝えた。すると学生ボランティアと一緒に子どもたちの招集、誘導、競技の説明、競技後の指示など、積極的に協力し、運動会の成功に尽力してくれた。カンボジアでは、教職による給与では家計が成り立たないという現実があるため、先生方の積極的な協力は仰げないかも、といった一抹の不安はあっという間に払拭された。もしかすると最も楽しんでいたのは教師たちかもしれない。



↑最終組の後、思わず教師チームが餃い競争へ参戦

4) 地域の方々

日本人が何やら小学校で運動会とやらをやるらしい、という情報を聞きつけて、またはこの小学校へ通う子どもたちが前日家へ持ち帰ったチラシを見て、興味津々の見学である。しかし地域の方の視線は、子どもたちの競技を行う様子だけに向けられたものではなく、子どもたちや教師らの頑張りが創り出す臨場感や一体感に向けられていたように思う。この運動会が、この地域にはない村のイベント、祭りとしての役割を



↑身を乗り出して観戦、ついに立ち入り禁止ロープ登場

担うのではないだろうか、と感じさせる視線であった。

5) 学生ボランティア

学生たちの活動の様子にただただ関心しきりであった。役割を全うし、空気を読み、自らの意思・判断で行動へと移す。4大学が一つになり、垣根を越え、自分を出し尽くした瞬間がそこにあり、学生の成長の凄さを実感した。



↑限られた道具を使うため、スタートとゴールを往復

3. 国際教育協力とは

「カンボジアの子どもたちに学校体育の素晴らしさを届けるプロジェクト」と題して取り組んだ第1回チョンカル村大運動会の様子の一部を紹介した。閉会式後、寄付で頂いた文房具を子どもたち一人一人に渡し、満面の笑顔で家路につく子どもたちを見送った後、村の方々が「感謝のしるし」として伝統料理でスタッフ全員に振る舞ってくれた。もともと予定になかった村の方々のこの振る舞いを頂いたことは、チョンカル村の現状に合った体育（運動会＝学校行事）が、

決してミスマッチな試みではなかったことを確信した瞬間であった。

このプロジェクトは、まだスタートしたばかりであるが、「もう自分たちの手でできるようになったから、来なくていいよ」とチェ・マオ校長先生がおっしゃるまでは、継続していく予定である。今年度は11月に小学校と中学校で実施する計画を立てている。この継続があってこそ定着が生まれ、その土地、文化にあった体育活動となれば、国際教育協力として一つの振興活動と言えるのではなかろうか。

〈文献〉

海野勇三, 鐘ヶ江淳一, 中島憲子, 續木智彦, 入江航生 (2013) カンボジアにおける学校体育振興への国際教育協力 — 北部チョンカル村での運動会開催の試み —, 山口県体育学研究, 第56号, pp.19-33.



↑次へとつながる固い握手と満面の笑み（マオ校長と海野氏）



↑参加賞の文房具セットをのぞき込むこどもたち



↑終了後、地域住民からの炊き出しを囲んでのコーマ



↑仲良し三人で「やった～！」のVサイン



↑昼食後、担任の先生の手ほどきで伝統のダンスで心ひとつに

九州共立大学

九州共立大学 得居雅人

九州共立大学は、昭和40年に北九州市八幡西区折尾の地に創設された。現在は、九州女子大学・短期大学、自由ヶ丘高等学校、自由ヶ丘・折尾・くらて幼稚園を有する福原学園の中核を担っており、経済・スポーツの2学部から構成されている。校門には、創設者福原軍造が唱えた「自律処行（自らの良心に従い、事に処し善を行う）」の碑が建ち、その学是の下、自ら立てた規範に従って自己の判断と責任の下に行動できる人材の育成に力を注いでいる。キャンパスは、JR折尾駅から徒歩10分、背後には北九州学術研究都市が広がる文教地区に立地している。スポーツ学部A館・B館には講義室や教員研究室、実験室、トレーニング室が配置され、講義や実習が行なわれている。スポーツ施設として、福原記念館（体育館）、第二体育館、耕技館（体操・柔道・剣道場）、室内プール、公認陸上競技場、野球場、サッカー場、ラグビー場、ハンドボール場を有し、実技の授業やクラブ活動の場となっている。

スポーツ学部は、平成18年にスポーツ学科1学科3領域（コーチング、コンディショニング、スポーツ教育）定員200名で発足した。翌19年には250名に増員、22年には4コース制（スポーツ教育、コーチング、スポーツトレーナー、健康フィットネス）を敷き、現在に至っている。学生は、1年次には主にキャリアデザイン科目や総合教養科目などの全学共通科目、およびスポーツ学部共通科目を学修し、2年次にそれぞれの進路や興味に応じたコースを選択し、専門性を深めてゆく。スポーツ教育コースにおいては、特に青少年に対し、年齢に応じたスポーツ指導や提案を行い、スポーツ技術の向上につながる適切な指導を行う技術を身につけ、経験を積みながら指導者としての総合力を向上させている。コーチングコースにおいては、ハイレベルなアスリートから一般的なスポーツ愛好家までのスポーツ技能向上のため、適切な指導ができる人材を育成しており、最新のスポーツ理論の学習とハイテク機器によるスポーツ科学実習を通し、理論と技術を兼ね備えた高度なコーチング能力を養成している。スポーツトレーナーコースにおいては、スポーツ選手が

能力をフルに発揮するために必要なコンディショニングの調整法について、怪我の予防やリハビリなど様々な方面からノウハウを学び、最高のコンディションを作るトレーナーを育成している。健康フィットネスコースにおいては、健康増進や生活習慣病対策において、運動を指導する専門家の必要性が言われていることから、健康を保つための運動や栄養など、日常の健康指導に必要な技術を学んでいる。各コースでは、インターンシップ・学外実習により学内外のスポーツ現



学是「自律処行」



グラウンド（左：サッカー、中：ハンドボール、右ラ
グビー、奥：陸上競技）

場で実習を行なう機会があり、現場を経験することが大学での学修にもフィードバックされ、理論と実践の好循環を生んでいる。

取得可能な資格・免許は、教員免許（中学・高校保健体育）、日本体育協会認定アスレティックトレーナー（AT）・ジュニアスポーツ指導員・スポーツプログラマー・アシスタントマネジャー、健康運動指導士・実践指導者、エアロビクダンスエクササイズインストラクター、チャンピオンストラクター、社会教育主事（任用資格）等であり、難関である教員採用試験やATには毎年現役合格者を出している。

毎年4月には、新入生学外研修が開催され、九共大生としての一歩を踏み出す。この研修にはサポート学生として主に教員を目指す上級生が参加し、集団行動の指導や履修のアドバイスを行う。1泊2日の短い期間ではあるが、入学初頭の不安な時期の仲間づくりや先輩後輩の関係づくりに重要な研修となっている。また、1年次には、毎週1回0時限に朝礼を実施し、礼節、感謝、謙虚な心を養い、挨拶の徹底を学ぶ。朝礼にも上級生が参加し学生相互の教育的活動が行われて

いる。夏期休業中には、キャンプ・マリンスポーツ（ウインドサーフィン）実習、春期休業中にはスノースポーツ・マリンスポーツ（スクーバダイビング）実習が開講され、アウトドアスポーツに親しんでいる。学生は、3年次に卒業研究ゼミを選択し、2年間かけて卒業研究に取り組む。4年次には卒業研究発表会が開催され、ポスター発表形式で発表する。

スポーツ学部設置前からクラブ活動が盛んであり、野球部は多数のプロ野球選手を輩出し、体操競技部は五輪金メダリストを生んでいる。スポーツ学部設置後は全国的に活躍するクラブが増加し、陸上競技部やレスリング部からは日本チャンピオンが生まれている。

学是「自律処行」を実践すべく、スポーツ学部生の教育活動の向上と学術活動の振興を目的として「スポーツ学会」が設立されている。「学生の、学生による、学生のための学会」の名の通り、学生による自主的活動によって運営されており、学生が計画・立案したさまざまなプロジェクトを支援するプロジェクト助成事業や著名人による講演会が行なわれている。



新入生学外研修



卒業研究発表会



マリンスポーツ実習（ウインドサーフィン）



スポーツ学会総会